

「不完全」を表す字音接頭辞の体系性

張 明

[キーワード：①字音接頭辞 ②体系性 ③「不完全」 ④意味 ⑤後接語]

1. はじめに

本稿の字音接辞は、山下(2018)、張(2018)にしたがって、「新・チーム・ト脱原発・ム未発表・セ感情的・シ映画化・カ勉強家」の「新・ト脱・ム未・セ的・シ化・カ家」のように、主に二字以上の漢語や和語、外来語に前接または後接して合成語を形成する字音形態素のことを指す¹⁾。「新・ト脱・ム未」のように、二字以上の漢語や和語、外来語に前接して合成語を形成するものは字音接頭辞、「セ的・シ化・カ家」のように、後接して合成語を形成するものは字音接尾辞であるとされている。

字音接辞の研究は、種類が豊富で、「セ的」のように名詞と結合し、合成語全体を形容動詞にするという品詞転換機能を持つものが多い字音接尾辞が今まで多く研究されている。それに対して、字音接頭辞は、種類が少ないのに、「不」「無」「非」などの否定を表すもの以外は品詞転換機能を持たないため、ほとんど研究されていない。

さらに、山下 (2013) によると、字音接辞の研究は、ごく限られたものしか研究対象として取り上げておらず、その意味用法や造語機能について詳しい記述をするものが多い。「カテゴリー化とカテゴリー相互の意味的關係を明らかにすること、そしてカテゴリー内部の成員相互の比較分析を進めることが、現代日本語における接辞性字音形態素 (筆者注: 本稿の「字音接辞」に相当) の研究として今後の大きな課題といえる」(山下 2013: 105) と指摘している。

以上のように、字音接辞、特に字音接頭辞の体系的な研究が必要であることがわかる。そこで、本稿は、「不完全」を表す字音接頭辞というカテゴリーを取り上げることにする。「不完全」を表す字音接頭辞には、「副社長・半導体・準決勝・准教授・亜熱帯・助監督」の「副・半・準・准・亜・助」がある。本稿は、コーパスで収集した用例に基づいてそれらの意味・用法を考察したうえで、どういった体系性をなしているのかを明らかにする。

2. 「不完全」とは

本論に入る前に、まず本稿の「不完全」とは何かについて述べておく。国語辞典を確認すると、本稿の考察対象である「副・半・準・准・亜・助」といった字音接頭辞の中に、「不完全」という意味解釈が記述されているのは、「半」のみである。例えば、次の (1) は『大辞林 第三版』における「半」の意味記述である。

- (1) 名詞の上に付いて複合語をつくり、なかば、半分、不完全などの意を表す。「一病人」「一殺し」「一煮え」

(『大辞林 第三版』三省堂, 2006)

(1) を見れば、「半」は「不完全」を表す字音接頭辞だと位置づけるのは問題がないだろう。そのほかの「副・準・准・亜・助」の意味記述には、「不完全」という表現が見当たらない。それらの表す「不完全」とは何かについて補足して説明する必要がある。

例えば、「副社長」は社長ではないが、社長に最も近い、社長の下の段階という意味である。「準優勝」は、優勝ではないが、優勝に次ぐ、ほかの順位より優勝に最も近い段階という意味である。「准教授」の「准」も同様に、教授ではないが、教授に次ぐ、教授に最も近い、その下の段階という意味である。「亜熱帯」の「亜」も、熱帯ではないが、熱帯に次ぐ、その下の段階という意味である。「助監督」は、監督ではないが、監督の下の段階で補助する意味である。

このように、本稿の「不完全」とは、「Xに最も近い、Xに次ぐ段階」という意味で使われる場合がある。「半」と合わせて、「副・準・准・亜・助」も便宜的に「不完全」を表す字音接頭辞というように一括して論を進める。「不完全」という表現は、最善の命名でないかもしれないが、便宜上「不完全」という表現を用いることを断っておく。

3. 考察資料と用例

本稿は、資料として、国立国語研究所で制作された『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）を使用した。中納言を使用し、短単位検索で、キーを未指定にし、前方共起をキーから1語に設定し、それぞれ「書字形出現形 が 副・助・半・準・准・亜 AND 語彙素読み が フク・ジョ・ハン・ジュン・ジュン・ア」という指示でコア・非コアを含める全データをそれぞれ検索した。目視で用例を確認し、字音接頭辞として用いられていない用例（不要な表現）を除外した。各字音接頭辞の最終的な用例数は次の表1の通りである。

表 1 用例数

	「副」	「半」	「準」	「准」	「亜」	「助」
異なり語数	255	288	241	19	39	12
延べ語数	5623	2152	1370	196	812	794

以下では、用例数が多いが、意味用法は比較的簡単な「副」から検討する。その次に、用例数も多く、意味的に類似性が高い「半」と「準」について考察する。それから、用例数が少ない「准」「亜」「助」を順次に見ていく。最後に、6つの字音接頭辞はどのような体系性をなしているかについて考える。

4. 「不完全」を表す字音接頭辞の意味用法

4.1 「副」について

「副」の意味用法を検討するために、まず「副」はどのような後接語と結合するのかについて見ておく。「副」の後接語は、意味によって、大まかに身分・官職を表すもの、身体部分を表すもの、その他という3分類をすることができる。まとめると、次ページの表2のようになる。

表2で挙げた「副」の後接語を見ると、中心となるもの、主要となるものであるといえる。例えば、身分・官職を表す語で、「社長」「会長」は、ある会社の中で中心となる人物であり、通常一人しかいない。「大統領」「首相」も、ある国の中で中心となる人物であり、通常一人しかいない。「副」をつけることによって、中心・主要でなく、その中心・主要となるものの下の段階という意味を表す。また、後接語を見ると、「社長」「大臣」「部長」などのように、「一人以上の定員を持つ」(久保 2016)という特徴を持つ。中国語では、「准教授」という意味で、「副教授」という言い方をするが、日本語では、「副教授」という言い方はない。それは、「教

表2 「副」の後接語の3分類

身分・官職 (異なり 180、延べ 3401)	社長 (397) ²⁾ 、会長 (309)、大臣 (298)、大統領 (185)、長官 (164)、議長 (149)、部長 (129)、首相 (124)、委員長 (116)、知事 (99)、院長 (92)、総裁 (81)、理事長 (77)、市長 (69)、本部長 (60)、主席 (58)、操縦士 (47)、総理 (39)、総統、校長 (38)、頭取 (31)、頭目 (28)、代表、所長 (27)、団長 (25)、検事 (24)、将軍 (23)、参事、学長 (22)、隊長、会頭、主任、幹事長 (20)、局長、編集長 (19)、領事 (18)、支店長 (17)、館長、署長、支部長 (16)、司令官 (15)、駅長 (13)、支配人 (12)、担任、園長 (11)、町長、住職 (10)、主査、看守長、施設長 (9)、課長、総監、保安官 (8)、特使、指揮官 (7)、担当、座長、管区長、キャプテン、走査 (6)、住民、店長、総長、総督 (5)、出現頻度4以下は省略
身体部分 (異なり 12、延べ 338)	甲状腺 (141)、交感神経 (112)、鼻腔 (66)、睾丸 (7)、細胞 (4)、呼吸筋 (2)、神経、性器、気管支、神経核、腎皮質、内側核 (1)
その他 (異なり 63、延べ 1884)	作用 (1278)、産物 (151)、都心 (108)、反応 (44)、読本 (32)、反射鏡 (27)、守護神 (22)、収入 (19)、音声 (14)、資材、食物 (12)、教材 (11)、回線 (8)、教本、生物、食品、調整室、変速機 (7)、主題、原料 (6)、地獄、助詞、武装、主幹、生成物 (5)、出現頻度4以下は省略

授」は一人以上の定員を持たないため、「副」との結合条件に一致しないと考えられる。

「その他」を表す語もほぼ同じことがいえる。例えば、薬はある特定の病気を治すという中心・主要となる作用がある。その中心・主要となる作用とは別に出てくる作用は「副作用」になる。「中心・主要でない」という意味で、官職・身分を表す語と共通する。また、「都心」も同様に、ある都市に1つしかなく、名の通りで中心となる存在である。「副都心」は、中心となる存在でなく、都心の下段階で、都心を補助する働きをする。「その他」を表す語も、官職・身分を表す語と同様に、「副」をつけることによって、「中心でない」「主要でない」という意味を表す。また後接語に

よって、間接的に「補助的」「付随して生じる」という意味も生じることがいえる。

身体部分を表す語は医学専門用語が多く、一概にはいえないが、例えば「副甲状腺」は甲状腺の左右両葉の裏面の上下2対ある。機能からすれば、甲状腺とは別の器官になるが、存在位置からすれば、甲状腺に付随して存在するものである。「副」が表す「付随的」「中心でない」という意味は効いていると考えられる。

4.2 「半」について

「半」の意味用法を検討するために、まず「半」はどのような後接語と結合するのかについて見ておく。「半」の後接語は、「半」がどの部分を修飾するのかを基準に、大まかに動詞・形容詞³⁾として使われるもの、動詞・形容詞の要素が現れているもの、量・長さに関わるもの、その他という4分類をすることができる。まとめると、次ページの表3のようになる。

表3で示した後接語と結合する「半」は程度性を持つ語と結合しやすく、その程度が十分でないという意味を表すと考えられる。

仁田(2002:147)では、〈程度性〉というものは、属性(質)や状態が幅・度合い・スケールを帯びて、その属性や状態として成り立っていることから生じる。ある属性や状態には、様々なレベル・段階が存在する。属性や状態の程度性が変化するということは、属性や状態のレベル・段階が変わることだと述べている。

通常、程度性を持つ語は動詞や形容詞が一般的であるが、「半」の後接語の中には、まず、「透明」「狂乱」などのように、形容動詞・サ変動詞の語幹として使われるものがある。また、「ずり」「割り」「笑い」などのように、動詞の連用形がそのまま名詞として使われるものもこのグループに入れている。「半透明」は、「透明」に近いが、「透明」の程度が十分でな

表3 「半」の後接語の4分類

動詞・形容詞として使われるもの (異なり 116、延べ 599)	透明 (188)、狂乱 (50)、回転 (32)、強制 (28)、解凍 (25)、ずり (20)、同棲 (18)、乾燥 (18)、割り (11)、押し、健康 (10)、笑い (8)、完成、独立、返し縫い、発酵 (7)、固定、覚醒、促成 (4)、立ち、練り、切り、脱ぎ、刈り、折り、抽象、熟練、断食、失業、同居、固結、合成、公然 (3)、出現頻度が3以下のものを省略
動詞・形容詞的要素が現れているもの (異なり 42、延べ 1056)	導体 (840)、永久 (64)、製品 (45)、自動 (27)、流動 (9)、長靴 (8)、病人 (6)、耐久、遠洋性 (5)、恒久 (4)、硬質、名人、畜養 (3)、耐寒性、遊動、高層、識字、抜糸 (2)、出現頻度が1のものを省略
量・長さに関わるもの (異なり 31、延べ 231)	ズボン (94)、地下 (39)、直線 (11)、整数 (11)、コート、ライス (9)、パンツ、チャーハン (7)、定量、キャップ (6)、地階 (5)、地下室、袴 (3)、画角、股引、のれん (2)、出現頻度が1のものを省略
その他 (異なり 99、延べ 266)	植民地 (29)、貴石 (17)、クラッチ、音階 (16)、陰陽 (13)、封建 (12)、母音、加算器、砂漠 (6)、労働力、SS、磁器 (5)、ドア、立体、逆光 (4)、均質、奴隷、プロレタリアート、濁音、教養、懸崖、金属 (3)、出現頻度が2以下のものを省略

い、十分に「透明」でないという意味を表す。「半狂乱」も、「狂乱」に近いが、「狂乱」の程度が十分でない、十分に「狂乱」でないという意味を表す。

また、「半」の後接語の中には、直接動詞・形容詞として使われるものではないが、動詞・形容詞的要素が現れているものがある。例えば、「導体」は、「導」という動詞的要素が現れており、「遠洋性」は、「遠」という形容詞的要素が現れている。「半」は、「導体」の「導」や、「遠洋性」の「遠」という動詞・形容詞的要素を修飾し、「半導体」は、「導」の程度が十分でない「導体」という意味を表し、「半遠洋性」も、「遠」の程度が十分でない「遠洋性」という意味を表す。

次に、「半」の後接語の中には、量・長さに関わるものがある。量・長さに関わるものは、幅・度合い・スケールを帯びているため、程度性を持つと考えられる。例えば、「半ズボン」は「ズボン」の長さが十分でない「ズボン」という意味を表し、「半ライス」も、「ライス」の量が十分でない「ライス」という意味を表し、「半」は、その量や長さが十分でないという意味を表す。

最後に、「半」の後接語の中には、「植民地」「母音」「砂漠」など、程度性が感じにくい語がある。しかし、「植民地」「母音」「砂漠」が持つ性質が十分でないということを「半」で表すと考えられる。

よって、「半」は程度性を持つ語と結合しやすく、その程度や性質が十分でないという意味を表すということがいえる。ただし、「半」という漢字が持つ「半分」という意味の影響で、「その程度や性質が十分でない」といっても、半分以下という程度では意味的に許されない。例えば、「透明」の程度性を数値化すると、「透明」は透明の度合いの最大値1、「不透明」は透明の度合いの最小値0になる。「半」という漢字の意味によって、透明の度合いが5以上ないと、「半透明」という言い方が成り立たないだろう。

4.3 「準」について

4.2では、「半」は程度性を持つ語と結合しやすく、その程度が十分でないという意味を表すと述べた。一方、本節で検討する「準」の後接語は、「半」とは異なる特徴が見られる。「準」の後接語の中に、出現頻度が10以上の語を示すと、次の(2)のようになる。

- (2) 決勝 (383)、優勝 (196)、構成員 (40)、禁治産 (39)、大手 (27)、オープン (21)、ミリ波、一級 (19)、加盟、指定地 (18)、

2級（16）、防火地域、工業地域（15）、社員、主役（13）、軍属、司法（12）、地下街、消費貸借（11）、会員、指導員、抗告（10）

「準」の後接語には、段階性が想定されやすい語が多い。段階性を持つ語と結合し、「準」はその段階ではない、その段階に次ぐものであるという意味を表す。

まず、「段階性」とは何かについて見てみる。例えば、「準決勝」は、「決勝」ではないが、「決勝」の前の段階、「決勝」に次ぐ段階という意味を表す。「決勝」「準決勝」「準々決勝」の間に、明確な境界が存在し、それぞれの範囲が明確に定められており、図1のようなヒエラルキー状のイメージが想定される。本稿は、「決勝」「準決勝」「準々決勝」のように、明確な境界が存在し、それぞれの範囲が明確に定められており、ヒエラルキー状のイメージが想定される特徴を「段階性」と呼ぶ。

ほかの例も検討してみる。「準優勝」は、「優勝」ではないが、「優勝」に次ぐ段階という意味を表す。「優勝」「準優勝」「第三位」のように、明確な境界が存在し、それぞれの範囲が明確に定められ、段階性を持つと考えられる（図2）。また「準工業地域」もそうであり、「工業地域」ではないが、「工業地域」に次ぐ段階という意味を表す。「工業専用地域」「工業地域」「準工業地域」のように、段階性があり、それぞれの間に明確な境界が存在し、範囲が明確に定められているという特徴が見られる（図3）。

前節で主張した「程度性」と本節の「段階性」についてももう少し確認

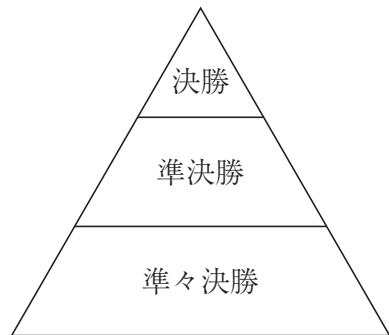


図1 「準決勝」

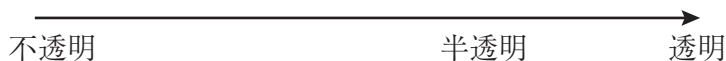
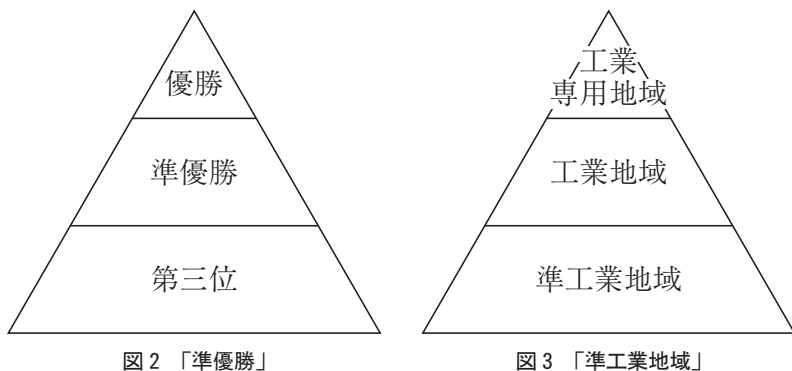


図4 「半透明」

しておく。「段階性」については、上述したように、明確な境界が存在し、それぞれの範囲が明確に決められているという特徴を「段階性」と呼ぶ。それに対して、「程度性」とは、明確な境界や範囲が存在しないものを指す。例えば、「透明」（透明の度合いが最大値）と「不透明」（透明の度合いが最小値）の間には連続しており、「半透明」はどこからどこまでを指すか、明確な境界や範囲が存在しない。段階性はヒエラルキー（図1～3）、程度性はスケール（図4）のイメージが考えられる。

ただし、段階性があるか、ないかというように二分することが難しいというのも事実だろう。「準大手」「準新作」という用例もBCCWJから収集されたが、「大手」「新作」などの語は、どのように段階性があると理解すればよいのかという問題は確かに存在する。「大手」と「大手でない」の中間段階として「準大手」、 「新作」と「新作でない」の中間段階として、「準新作」が使われるというように、段階性として理解できる。しかし、明確な境界・範囲が存在する段階性というより、むしろ明確な境界・範囲

が存在しない程度性として理解しやすいのではないと思われる。「大手」「新作」といった語の中に、「大（きい）」「新（しい）」という形容詞的要素が存在する。「準大手」は、「大手」の程度が十分でないという意味を表し、「準新作」は、「新作」の程度が十分でない、十分に「新作」でないという意味を表す。そうすると、「準」というより、むしろ「半」のほうが結合すべきだが、なぜ「半」ではなく、「準」と結合するのか。それは興味深い問題で、歴史的な変化を確認する必要がある。字音接頭辞を通時的研究の視点で考察することを今後の課題にしたい。

「大手」「新作」のように、段階性があると考えにくく、むしろ程度性があると考えやすい語と結合する場合は、なぜ「半」ではなく、「準」が使われるのかという問題は難しい。しかし、「準」のほうは、明確な境界・範囲が存在するもの、段階性があるもの、と結合しやすく、その段階ではない、その段階に次ぐものであるという意味を表す。それに対して、「半」のほうは、明確な境界・範囲が存在しないもの、程度性を持つものと結合しやすく、その程度が十分でないという意味を表す。このような傾向がいろいろではないかと思われる。

4.4 「准」について

「准」の後接語の異なり語数は、19しかないため、全データを示すと、次の(3)の通りである。

- (3) 教授 (67)、看護師 (55)、看護婦 (18)、士官 (13)、組合員 (11)、豊臣 (6)、男爵 (5)、看護 (4)、学士、元帥 (3)、太上天皇、訓導 (2)、博士、官人、看護師、陸尉、名人、研究員、医師 (1)

「准」の後接語は、「人」を表す語がほとんどであり、「准」の造語力が低く、ほぼ慣用的で、決まった言い方であることがわかる。

意味用法としては、「准」は、「準」に近く、段階性がある語と結合しやすく、その段階ではない、その段階に次ぐものであるという意味を表す。

4.1 では、「准教授」という表現は中国語では、同じ意味で「副教授」という表現が使われるということを述べた。「教授」「准教授」「専任講師」というように、段階性があり、「教授」という段階ではない、「教授」に次ぐ段階という意味を表すため、日本語では、「副」ではなく、「准」が使われると考えられる。

意味用法という点で、「准」は「準」と類似するが、造語力という点で異なる。「準」は造語力が高く、段階性がある語と幅広く結合する一方で、「准」は造語力が低く、「人」を表す語としか結合しないという点で違いが見られる。

4.5 「亜」について

「亜」の後接語の異なり語数は、39 しかないため、全データを示すと、次の (4) の通りである。

- (4) 熱帯 (168)、硝酸 (69)、酸化窒素 (51)、硫酸 (43)、寒帯 (40)、急性 (22)、大陸 (20)、高山帯 (18)、宇宙 (17)、音速 (12)、高山 (11)、南極 (10)、リアリズム、脱臼 (8)、共晶 (7)、空間 (6)、分類 (4)、有茎性、砒酸 (3)、テロメア、メラニン、成層圏、高木、間氷期、区域、砂漠、塩素酸、原子粒子 (2)、リン酸、成体、腹側、幹線、瀝青炭、全リンパ節照射、群集、社会性、氏族、形態、葉酸 (1)

「亜」の後接語は、地理や化学を表す語が多く、「准」は、「准」と同様に、造語力が低く、ほぼ慣用的で、決まった言い方が多いことがわかる。

意味用法としては、「亜」は「準」に近く、段階性がある語と結合しやすく、その段階ではない、その段階に次ぐものであるという意味を表す。例えば、出現数が最も高い「亜熱帯」は、「熱帯」「亜熱帯」「温帯」というように、段階性があり、「熱帯」という段階ではない、「熱帯」に次ぐ段階という意味を表す。

意味用法という点で、「亜」は「準」と類似する点があるが、造語力という点で異なる。「準」は造語力が高く、段階性がある語と幅広く結合する一方で、「亜」は造語力が低く、地理や化学を表す語と結合することが多いという点で違いが見られる。

4.6 「助」について

「助」の後接語の異なる語数は、12しかないため、全データを示すと、次の(5)の通りである。

- (5) 教授 (485)、動詞 (206)、監督 (85)、数詞 (6)、修士 (3)、教諭、酸素 (2)、成分、教員、司祭、外野手、修女 (1)

「助」の後接語は、異なり語数が少ないため、明確な特徴が見られないが、「人」を表す語が多い。「助」は「准」「亜」と同様に、造語力が低く、ほぼ慣用的で、決まった言い方であることがわかる。

造語力が低いという点で、「助」は、「准」「亜」と同じであるが、意味用法としては、「助」は、「助」という漢字が表す「助ける」という意味が前面に出ており、中心となるもの、主要となるものを助けるという意味を表す。その意味で、意味用法としては、「助」は、「准」「亜」とは異なり

「副」に近いのではないかと考えられる。

5. 「不完全」を表す字音接頭辞の体系性

以上のように、「不完全」という意味で類似する字音接頭辞「副」「半」「準」「准」「亜」「助」を見てきた。本節では、それらの体系性について考える。

まず、中心となるもの、主要となるものではないという意味を表すか、性質が十分でないという意味を表すか、大きく2分類することができる。中心となるもの、主要となるものではないという意味を表すのは、「副」と「助」である。性質が十分でないという意味を表すのは、「半」「準」「准」「亜」の4つである。また、性質が十分でないという意味を表すものは、後接語が明確な境界・範囲が存在しないもの、程度性を持つものであるか、後接語が明確な境界・範囲が存在するもの、段階性を持つものであるか、さらに2分類することができる。後接語が明確な境界・範囲が存在しないもの、程度性を持つものには、「半」がある。後接語が明確な境界・範囲が存在するもの、段階性を持つものには、「準」「准」「亜」がある。

また、造語力が高いか、低いかという観点からも分類することができる。造語力が高いのは、「副」「半」「準」である。造語力が低いのは、「助」「准」「亜」である。

以上のことをまとめると、次の表4のようになる。

表4 「不完全」を表す連体詞型字音接頭辞の体系性

	中心となるもの、主要となるものではないという意味を表す	性質が十分でないという意味を表す	
		後接語が程度性を持つもの	後接語が段階性を持つもの
造語力が高い	「副」	「半」	「準」
造語力が低い	「助」	×	「准」「亜」

6. おわりに

本稿の冒頭で、字音接辞のカテゴリー化・体系化が重要な課題だと指摘した。そこで、本稿は、「不完全」を表す字音接頭辞を取り上げ、その意味用法を考察したうえで、「不完全」を表す字音接頭辞の体系性を提示した。

前節の最後に、造語力について述べたように、「不完全」を表す字音接頭辞の中には、「副」「半」「準」のように、現代日本語において、使用頻度が高く、後接語と比較的自由に組み合わせることができるもの、いわゆる造語力が高いものもあれば、「助」「准」「亜」のように、慣用的で決まった組み合わせしかできない、造語力が低いものもある。なぜ、現代語において造語力に差が出てくるのか、通時的研究の視点も必要である。通時の研究を通して、現代語の意味用法に対する理解も深まると考えられる。

また、「副」と「准」のところ少し述べたが、日本語では「准教授」という表現が使われるが、中国語では、同じ意味で「副教授」が一般的に使われている。「不完全」を表す字音接頭辞というカテゴリーに関しては、中国語とどのような共通点と相違点が見られるのか。その意味用法は、日本語の歴史で独自に発展してきたのか、それとも中国語による影響なのか。中国語との対照研究および通時的研究は現段階ではまだ考察の準備が整っていないため、併せて今後の課題にしたい。

参考文献

- 久保圭（2016）『日本語接辞にみられる否定の意味的多様性とその体系的分類』平成28年度博士論文、京都大学大学院人間・環境学研究所
- 張明（2018）「字音接辞の分類」『学習院大学大学院日本語日本文学』14. pp. 130-101. 学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻

仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』 くろしお出版

山下喜代 (2013) 「接辞性字音形態素の造語機能」 野村雅昭 (編) 『現代日本漢語の探究』, pp. 83-108. 東京堂出版

山下喜代 (2018) 「字音形態素のカテゴリー化—接辞を中心に—」 『青山語文』 48. pp. 217-228. 青山学院大学日本文学会

註

- 1) この定義の詳細および字音接辞に当たるものはどのようなものがあるのかについては、山下 (2018)、張 (2018) を参照されたい。
- 2) 括弧内の数字は出現頻度を表す。以下も同様。
- 3) 形容動詞も含む。

The Systematicity of the Sino-Japanese Morphemes Meaning ‘Incompleteness’

ZHANG, Ming

There are six Sino-Japanese morphemes meaning ‘incompleteness’, which are *huku*, *han*, *jun*, *jun*, *a* and *jo*. In addition to the meaning and usage of the Sino-Japanese morphemes, this paper also discusses what kind of the systematicity they constitute, inspired by the data collected from the BCCWJ.

First, this paper examines the systematicity of the Sino-Japanese morphemes from the perspective of their meanings and usages. Both *huku* and *jo* do not mean “central” or “main”. The meanings of *han*, *jun*, *jun* and *a* impart an insufficient nature. More specifically, *han* should be used before nouns that cannot be separated, which express the meaning of degree; while *Jun*, *jun* and *a* are used before nouns that are easy to be separated, which express the meaning of stage. Second, this paper also examines the systematicity of the Sino-Japanese morphemes from the perspective of their productivity. The productivity of *huku*, *han*, *jun* is high, while that of *jo*, *jun*, *a* is relatively low.

As mentioned above, the Sino-Japanese morphemes meaning ‘incompleteness’ such as *huku*, *han*, *jun*, *jun*, *a* and *jo* constitute the systematicity.

（平成 30 年度日本語日本文学専攻 博士後期課程修了）

